

平成28年1月25日

西京区・洛西地域の新たな活性化懇談会  
会長 小石 玖三主 様

洛西京都市立芸大跡地検討会  
会長 福島 庸浩

### 芸大跡地利用計画策定の方向性に関する要望書

京都市におかれましては、洛西ニュータウンのまちづくりへのご支援、いつもありがとうございます。

このたび、京都市立芸術大学（以下芸大とする）移転に伴う跡地利用について、京都市と洛西ニュータウン住民が情報を共有し、洛西ニュータウン住民の声を京都市に届け、ともに跡地利用について考えることを目的とした、「洛西京都市立芸大跡地検討会」（以下「芸大跡地検討会」とする）を組織いたしました。

「芸大跡地検討会」のメンバーは、洛西ニュータウン創生推進委員会正・副委員長、洛西地域4学区の自治連合会会長、ならびに各連合会から推薦された委員各2名の計14名により構成されております。現在は、洛西4学区の構成となっておりますが、最終的には、芸大に隣接する地域も加わった組織となっていくものと想定しております。

「芸大跡地検討会」では、これまで芸大キャンパス視察と4回のディスカッションを経て、「芸大跡地利用計画策定の方向性に関する基本方針」（以下「基本方針」とする）を作成いたしました。

京都市におかれましては、今後この「基本方針」を尊重した芸大跡地計画の検討を行っていただくよう強く望むものです。

なお、「基本方針」作成に至った経緯は、以下のとおりです。

洛西ニュータウンは、京都市の事業として1969年に都市計画決定、事業決定され、その後、京都大学上田研究室によりイギリスの田園都市をまちづくりの基本としたマスタープランをもとに、設計・工事が行われ、1976年より入居が開始された、緑豊かな田園都市<sup>※</sup>です。

ご承知のように、田園都市は、原則的に、職、住が一体となった有機的都市であり、すばらしいことに、芸大が洛西ニュータウンと様々な形で関係をつくり上げながら今に至っております。

ところが、このたび発表された芸大の移転計画により、これまで形成されてきた洛西地域との関係が崩壊してしまうこととなります。

そこで、芸大跡地について、地域住民としても、京都市と連携し、地域と京都市の発展に寄与できるまちづくりとして利用計画を進めるべきではないかという意見が多く出されるようになってきました。これを機会に、芸大跡地の新しい施設と洛西地域が、今まで以上に良い関係をつくれることを願って、本「芸大跡地検討会」の設立に至りました。

以下の「基本方針」は、西京区・洛西地域の新たな活性化懇談会の中間報告に盛り込んでいただくよう、芸大跡地計画検討にあたっての基本的方向性について「同検討会」が議論し集約したものです。

※「田園都市」とは、イギリスの都市計画家 Ebenezer Howard(1850-1928)によって構想され、1902年につくられた田園都市レッチワース以来、世界の郊外のまちづくりの基本とされてきたもので、「都市と農村の結合」、職住を併せ持つ「自足性」等を特徴としている。

## 京都市立芸大跡地利用計画策定の方向性に関する基本方針

1. 京都市立芸大跡地利用計画は、洛西地域に生かされる計画とする。
  - 1) 西山のふもとの自然と調和し、大枝、大原野のたけのこや柿に代表される農業のブランド化等に寄与する計画とする。
  - 2) 洛西地域は、今後さらなる高齢社会が予想される。高齢者の福祉にも役立つ計画とする。
  - 3) 若い人がこのまちに住みたくなるような、楽しく、文化的であり、就労の場がつくられる計画とする。
  - 4) 京都市立芸大の充実した設備や建物を生かして、若い人々に創作活動の場を提供し、コンサートなどの芸術活動によって、地域との結びつきが生まれる文化・芸術の香りのする計画とする。
  - 5) 京都大学桂キャンパスと連携し、発展的施設、環境にやさしい施設を導入することにより、就労の場を創出するとともに、その前提であり住民の悲願でもある高速鉄道の実現を図る。
2. 京都市は、地域住民と情報を共有しながら、計画づくりを行う。
  - 1) 京都市は、計画に関する情報を地域住民に提供するとともに、住民の創意工夫を吸い上げながら計画立案を行う。
  - 2) 京都市は、地域住民の声を京都市に届ける橋渡しとして「洛西京都市立芸大跡地検討会」と連携・協力し、芸大跡地利用計画づくりを行う。